

幸田露伴『暴風裏花』の原話

須田千里

一

『暴風裏の花』(一) (大正十五年「一九二六」十月十一月『女性』)は、李自成によって明が滅ぼされた際、身を挺してその部下羅將軍を刺殺した費宮人をヒロインとする。これは、掲載誌『女性』の読者層に合わせた題材と推測され、語り口も「であります」「ました」という丁寧な語り口調で(二)、記述もわかりやすい。岩波文庫版『運命』第六刷(三)時に付加されたことで広く読まれたと考えられる。明初の靖難の変(四)に取材した『運命』(大正八年四月『改造』)に対し、本作は李自成(一六〇六〜四五)による明滅亡を扱っており、取り合わせの妙を感じさせる。また、男性群像を語った『運命』に対し、本作では十六歳の費宮人の類い稀な行動が称賛され、「李自成の如き凶賊の魄(たましひ)」「単行本以下「魂」も一婦人の為に奪はれたり」と「単行本以下「奪はれたかと」」思ふと痛快である。誰か女子の弱きは夫れ何事を成し得るものぞと云はうか」と語られる。節義をまっとうした一人の女性の生き方を示し、以て読者を感化しようとしたものであろう。

本作は、作品集『龍姿蛇姿』収録の際、自序に

自分は拠るところ無しには古人の上を描写せぬことにしてゐるので、「略」。大体に於ては何処までも拠るところ有る事実に本づいて、尠少の傳彩補筆「色づけ、加筆」を加へて、そして事を叙し情を伝へんことを欲するのが自分の希望である。「文庫版はここで改行」暴風裏花は稀有の事実を描いたものであるが、これ亦自分の造り出した事では無い、拠るところは本文に記して置いた通りである。

と記された。じつさい、作中には張廷玉ら編『明史』(五)卷三〇九・三〇五や『明史紀事本末』(六)が言及される他、末尾に「此の費宮人の事は明史には出て居らぬが、陸士雲の文や毛西河の言によつて自分は之を知つた。蓋し事実無根の談ではないのである。」とある。これを受けて、原田親貞「中国文学と幸田露伴(三)」——主として時代小説と史伝について——(昭和五十九年一月『学苑』)は、本作の典拠について『明史』卷三〇九「列伝」一九七「流賊」、三〇五「列伝」一九三「宦官」二のほか、卷二二「列伝」九「公主」、卷二四「本紀」二四「莊烈帝 二」末尾を挙げ、さらに李長祥『天間閣文集』所収「甲申宮人伝」を示した。しかし、費宮人が「主君と皇后、そして忠臣王承恩の祭祀を執行することを条件とし、羅の妻とな

ることを承諾すると欺く。」などの本作細部は、「露伴の創作になるものと考えられる。」とし、さらに上記「陸士雲の文や毛西河の言」について、「その原拠を見出すことはできなかった。」とする。また、「甲申宮人伝」で、はじめ長公主と名乗っていた費宮人が、他の宮人からそれを否定された後、「羅賊」に向かつて、自分は公主ではないが「天潢」「皇族」であると偽る点も、本作に見られない設定である。従って、「甲申宮人伝」を本作の直接の典拠とは考えにくい。

しかし、上記原田論文で「露伴の創作」とされた箇所や「陸士雲の文や毛西河の言」は、清の鄭澍若（字、醒愚）編『虞初統志』⁽⁷⁾二所収の陸次雲「費宮人伝」に見える。陸次雲の字は雲士が正しく、毛西河（毛奇齡）。『明史』編纂に加わった。1623（1716）の言葉は『虞初統志』「費宮人伝」末尾の評語「鄭醒愚曰」（後掲）に引用されている。両者対比すると、本筋に当たる「費宮人は年はたつた十六でありました」（十月号掲載分七〇頁一三行目。前掲注（一）新版『露伴全集』六で三二五頁二行目）以下は、「費宮人伝」を主に、『明史』を従に、ほとんど逐語的に訳したものであることがわかる。もちろん、発表誌『女性』の読者向けに基本的な情報を説明したり、（通り一遍の嫌いはあるにせよ）多彩な比喩表現などによって登場人物にリアリティを与えようとした箇所はあるが、筋自体に変更はないと言つてよい。本稿は、「拠るところ有る事実」がこれらを指すことを具体的に示し、「尠少の傳彩補筆」の実際を述べるものである。

『虞初統志』「費宮人伝」や『明史』と対照する前に、本作冒頭で触れられる「仏蘭西革命の歴史」について見ておきたい。これは、明末の李自成の暴虐に重ねられるもので、末尾でも、李自成の部下羅將軍を刺殺した費宮人と、「革命史」に見える、「獐猛なマラー」を殺した「一女子」とが重ねられている。これについて、塩谷贊『幸田露伴』中（昭和四十三年十一月中央公論社）は、大正十五年六月国民文庫刊行会から発行開始された『カーライル仏国革命史』上中下の通読体験によるとし、女子の名がシャルロット・コルデイであること、鼈頭評に「奇。シャルロット・コルデイは是れ沙漠の花。」とあることを紹介している。

本書は、高橋五郎訳により大正六年一月〜十月国民文庫刊行会から四冊本として出された後、大正十五年六月〜昭和二年六月、三冊本として露伴の序文と「補筆並評」を付して再刊。その第三巻第四編第一章「シャルロット・コルデイ女史」には、「身長タテのすらりとしたノルマンデイ式の美人であつて、年は二十五歳、顔は落着おちつきて美しかった。」（二九九頁。先の鼈頭評はこの箇所に対するもの）と形容される。そのマラー殺害の場面は、「シャルロットは既に其ナイフの鞘を脱し、十分に狙ひ定めて、只一衝ひとつきとマラット「マラー」が心臓を衝刺した。マラットは不意の重傷に只『吁嗟ああ余を、親愛な友よ早く来てくれ』と叫び得ただけである。『略』彼が魂たま神は一呻吟うなつて陰府よみへと飛去り了つた。」（三〇四頁。注・原語は省いた）とある。捕縛されたシャルロットは、裁判の上、謀殺者としてギロチンに掛けられる。

最後の一行事として彼女の頸より頸布を取り去るや、処女の羞恥が彼女の顔と頸を紅に染めたが、既に首を斬て、獄吏が之を公衆に向け示した時にも尚其紅の色は失ずしてゐた。(三二〇頁)

このように、費宮人による羅將軍刺殺という本筋の前後に、美しく可憐なシャルロット・コルデイによるマラー刺殺に触れるという構成は、同時期の『骨董』(大正十五年十一月『改造』)や、晩年の『幻談』(昭和十三年九月『日本評論』)でも用いられている。すなわち前者は、『渡世伝授車』四の一「道具目利」に拠る話を枕とし、本題として姜紹書『韻石齋筆談』上「定窯鼎記」に拠る話が語られ、後者はウイムバー『アルプス登攀記』下(浦松佐美太郎訳、昭和十一年九月岩波文庫)に触れた後で、鈴木桃野『反古のうらがき』一「きす釣」と同内容の話が語られる。露伴の好んだ話法といえよう。

三

本作の本題、李自成による北京侵攻と崇禎帝の自殺、費宮人の活躍などについて、『明史』及び『虞初統志』『費宮人伝』撰取の様相を検証しよう。

まず、「李自成の前に」「単行本以下」「李自成の出る前に」起りました盗賊ども「の」猛悪な名、「飛山虎」「大紅狼」「混天猴」「独行狼」「老猢猻」「上天龍」「混世王」「蝎子塊」「掃地王」は、『明史』卷三〇九「流賊」の「李自成」冒頭近くに、ほぼそのままの順序で見える。すなわち、崇禎元年(一六二八)の項に「飛山虎大紅狼」が、同三年の項に「混天猴独行狼」が、

同四年の項に「老猢猻」「掃地王」「上天龍蝎子塊」「混世王」が順に見える。明が滅亡したのは、これら「獸類を渾名にしてゐるやうな兇賊」(単行本以下「兇猛」)、「虎の如く狼の如く狒々の如く、蝎の如く、又地を掃つて一切の物を掠奪し、世を混じて善惡を滅茶々々にする、そんな恐ろしい厭はしいものども」すなわち「猛獸に襲はれて其の牙や爪にかゝつたやうなもの」だ、としている。彼等の中で「一番」(単行本以下「第一番」)の大将」が李自成である。

次に語られる李自成の経歴等は、本作及び原田論文いうように『明史』卷三〇九に拠る。本作の記述を踏まえて原田論文が引用した『明史』卷三〇九・三〇五・二四の記事には過不足があるため、主な出典である『虞初統志』『費宮人伝』と併せ、以下に改めて引用する。「費宮人伝」本文で、『虞初志合集之三虞初統志』(一九八六年六月上海書店)により改めた箇所は「」内に底本の文字を注記した。さらに、「筆記小説大観」(注(七)参照。「筆記」と略)独自の異同もへー内に注記した。次に、書き下し文を記し、適宜ルビを振るとともに注を「」内に記した。本作では、『明史』と「費宮人伝」を適宜繋ぎ合わせているため、引用順がわかるよう番号を付し、傍線を施した。また「費宮人伝」は長文のため、本作の改行に併せて適宜改行した。

『明史』卷三〇九「李自成」

李自成米脂人「略」父守忠無子禱於華山夢神告曰以破軍星為若子已生自成幼牧羊於邑大姓艾氏及長充銀川駅卒善騎射鬪很無賴數犯法知縣晏子賓捕之將置諸死脫去為屠

崇禎元年〔略〕宜州賊王左掛飛山虎大紅狼等一時並起有安塞馬賊高迎祥者自成舅也與饑民王大梁聚衆應之迎祥自称闖王

〔崇禎九年〕秋七月禽迎祥於整屋獻俘闕下磔死於是賊党乃共推自成為闖王矣

〔崇禎十三年〕自成為人高顓深顓鷗目曷鼻声如豺性猜忍日殺人斷足剖心為戲〔略〕嚴因說曰取天下以人心為本請勿殺人收天下心自成從之屠戮為減又散所掠財物振饑民民受餉者不奔嚴自成也雜呼曰李公子活我

〔崇禎十四年〕賊魁羅汝才土寇袁時中皆歸自成時中衆二十万号小袁營汝才即曹操與獻忠同降復叛去者也

〔崇禎十六年〕自成自号奉天倡義大元帥号羅汝才代天撫民威德大將軍〔略〕五營以序直昼夜次第休息巡徼嚴密逃者謂之落草磔之〔略〕軍令不得藏白金過城邑不得室处妻子外不得携他婦人寢興悉用單布幕〔略〕一兵伴馬三四匹冬則以茵褥籍其蹠剖人腹為馬槽以飼馬馬見人輒鋸牙思噬若虎豹〔略〕水惟憚黃河若淮泗涇渭則万衆翹足馬背或抱鬣緣尾呼風而渡馬蹠所壅閼水為不流臨陣列馬三万名三堵牆前者返顧後者殺之〔略〕攻城迎降者不殺守一日殺十之三二日殺十之七三日屠之凡殺人束屍為燎謂之打亮城將陷步兵万人環堞下馬兵巡徼無一人得免獻忠雖至殘忍不逮也〔略〕自成不好酒色脫粟粗糲與其下共甘苦汝才妻妾數十被服執綺帳下女樂數部厚自奉養自成嘗嗤鄙之汝才衆數十万山西舉人吉珪為謀主自成善攻汝才善戰兩人相須若左右手自成下宛葉克梁宋兵強士附有專制心顧獨忌汝才乃召汝才所善賀一龍宴縛之晨以二十騎斬汝才於帳中悉兼其衆

〔崇禎十七年三月〕十八日〔略〕帝〔略〕劍擊長公主趣皇后自尽十九日丁未天明皇城不守鳴鐘集百官無至者乃復登煤山書衣

襟為遺詔以帛自縊於山亭帝遂崩太監王承恩縊於側自成斃笠縹衣乘鳥駁馬入承天門〔略〕文臣自范景文勲戚自劉文炳以下殉節者四十余人宮女魏氏投河從者二百余人象房象皆哀吼流淚太子投周奎家不得入二王亦不能匿先後擁至皆不屈自成羈之宮中長公主絕而復甦昇至令賊劉宗敏療治

〔五月〕李巖者故勸自成以不殺收人心者也〔略〕金星等大忌之〔略〕自成令金星與巖飲殺之

『明史』卷三〇九「張獻忠」

獻忠黃面長身虎額人号黃虎性狡譎嗜殺一日不殺人輒悵悵不樂

『明史』卷三〇五「王承恩」

崇禎十七年三月李自成犯闕帝命承恩提督京宮是時事勢已去城陣守卒寥寥賊架飛機攻西直平則德勝三門承恩見賊坎牆急發礮擊之連斃數人而諸璫泄泄自如帝召承恩令亟整內官備親征夜分內城陷天將曙帝崩於壽皇亭承恩即自縊其下福王時諡忠愍 本朝賜地六十畝建祠立碑旌其忠附葬故主陵側

『明史』卷二四「莊烈帝」

丙午日晡外城陷是夕皇后周氏崩丁未昧爽內城陷帝崩於万歲山王承恩死御書衣襟曰朕涼德藐躬〔略〕朕死無面目見祖宗自去冠冕以髮覆面任賊分裂無傷百姓一人

『虞初統志』「費宮人伝」

費宮人年十六未詳其何地人德容莊麗懷宗語周后命侍公主主絕憐之宮人見上〔士〕憂流〔寇〕氛〔氣〕昌熾未嘗不竊抱杞人慮也

王承恩者懷宗之近侍也宮人私向之間寇警承恩曰若居深禁何用知此宮人曰惟居深禁不可不知而預為計也承恩奇之寇愈熾懷宗憂愈深宮人之間承恩者愈數承恩曰若何不詢諸他人而惟予數數也宮人曰人皆泄洩孰是以君國為意者吾見公忠誠故相問耳承恩益奇之曰若云預為計計安出宮人曰設不幸計惟有死要不可徒死耳承恩曰古人云使生者死死復生者不食其言可謂信矣若能之乎宮人曰請驗之異日有魏宮人者年差長于費亦端麗素與費善聞其言曰卿計甚難吾不能為難者當其時惟一死以伸吾志「忘」耳承恩並奇之甲申三月十九日李自成破都城王承恩「思」走報帝帝与后泣別宮中之人皆環泣后自縊袁貴妃亦自縊帝拔劍刃斫「所」〈所〉御嬪妃數人召公主至曰爾年十五矣何不幸生我家左袖掩面右手揮刃斷左臂未死手慄而止隨与承恩至南宮登万歲山之寿皇亭自縊帝居中而承恩右承恩且從容拜命而相隨于〈於〉鼎湖也時尚衣監何新者趨入宮見帝不得見公主仆地他宮人悉散走費宮人哭侍其側相与救之而甦公主曰父皇賜我死我何敢偷生且賊至必索宮眷我終難匿也宮人曰請以主服賜婢婢當誑賊以脫主顧安所往乎何新曰国丈第可也主授衣与婢而泣与之別新倉皇負主出李自成射承天門將入宮魏宮人大呼曰賊入大内我輩必受辱有志者早為計奮身躍入御河須臾從之死者盈三百翠積脂凝河水為之不流而香且數日也費宮人目「曰」送其死而還服主服匿胥井中賊鉤而出見李自成曰我長公主也若不得無礼自成見其豐艷心欲納之而每陸御座輒神搖目眩見白衣人長數丈者在前立又恍如帝之辟易于其左右也心畏之而不敢以賜其愛將羅姓者羅于〈於〉闕衝陷攻取居首功故自成賜之以酌勲羅甚喜宮人曰闕命吾不敢違矣然我帝子也爾能設祭祭先帝而附從難太監王承恩于〈於〉其側「測」從容尽礼則從子矣羅更喜甚從其請宮人泣拜先帝畢併拜承恩曰王公王公爾能死而復生以驗吾言乎吾將

踐平生言矣諸賊大張樂為羅賀羅痛飲大醉入内宮人亦具酒為同牢盞酌又以大觥連「道」飲羅羅曰吾得子欲草一疏謝闕王而愧無人宮人曰是何難我能之君盍寢俟我撰就語君「底本「語君」欠字」也羅愈喜陶然就臥駒如雷宮人屏去侍女挑燈独坐聞中外之籟俱靜於是以纖指挾匕首睨羅賊之喉力刺之羅頸裂負痛躍起屢仆屢躍而始僵賊衆驚聞「聞」排闥救之已無及時華燭尚明衆見宮人盛妝端坐而無語審視之則已到粉項而悠然逝矣聞於自成自成駭歎而礼葬之遂以為公主已死而不復索

陸士雲曰夫子云惟女子与小人为難養也女子小人宦官宫妾耶也宮妾如費魏宦官如王承恩即丈夫君子何以過耶余伝之以愧天下之丈夫而不丈夫号為君子而不為君子者

鄭醒愚曰毛西河言宮人頰「頰」死呼曰吾之不得殺自成天也蓋宮人初志在得自成不能得自成而死豈非天哉豈非天哉「筆記」豈非天哉「繰り返さず」然亦足襯自成之魄矣

『明史』卷三〇九「李自成」

1 李自成は米脂「陝西省綏德県の北」の人なり。「略」父守忠、子無く、華山に禱る。夢に神告げて曰く、破軍星「北斗七星の第七星、柄の先端の星。陰陽道では剣先に擬え、その指し示す方角を万事に凶として忌む」を以て若の子と為す、と。已にして自成生まる。幼にして、邑の大姓「土地の豪族」艾氏に羊を牧す。長ずるに及び、銀川駅の卒に充てらる。騎射を善くし、2 闕恨「喧嘩すること」無頼、数しば法を犯す。知県「県の長官」晏子賓、之れを捕へ、將に諸を死に置かんとするも、脱し去りて屠「家畜を殺して肉を得る業」と為る。

崇禎元年「略」、宜川「陝西省膚施県の東南」の賊王左掛、飛

山虎、大紅狼等、一時に並び起つ。3 安塞「陝西省膚施県の西北」に馬賊高迎祥なる者有り。自成の舅なり。饑民王大梁と衆を聚め、之れに応ず。迎祥、自ら闖王と称す。

「崇禎九年」秋七月、4 迎祥を藍屋「陝西省長安県の西」に禽へ、俘を闕下「帝の御前」に献じ、磔せしむ。是に於いて、賊党乃ち共に自成を推して闖王と為す。

「崇禎十三年」5 自成、為人高顧にして「ほお骨高く」深颯「頭が深く凹み」、鵠目鵠鼻「フクロウのような目つきにサソリのように上を向いた鼻。残忍凶暴な人相」、声は豺「オオカミ」の如し。性、猜忍「疑り深く残忍」、日に人を殺し、脚を断り、心を剖りて「胸を切り開く」戯と為す。「略」6 「李」巖因りて説ひて曰く、天下を取るに、人心を以て本と為す。請ふ、人を殺す勿かれ。天下の心を収めん、と。自成之れに従ひ、屠戮「身体を切り裂いて殺すこと」、為めに滅ず。又散所して「各地に分散して」財物を掠ひ、饑民を振ふ。民の餉「食糧」を受くる者、巖と自成とを弁ぜず。雜呼「共に叫ぶ」して曰く、李公子「李自成」、我を活かせり、と。

「崇禎十四年」6 賊魁羅汝才、土寇袁時中、皆6 自成に帰す。時中、衆二十万にして、小袁営と号す。汝才即ち曹操「羅汝才の別名」は、猷忠と同じく降り、復た叛き去る者なり。

「崇禎十六年」a 自成、自ら奉天倡義大元帥と号し、羅汝才を代天撫民威徳大將軍と号す。「略」五 営「李自成の五つの軍営」は序を以て昼夜に直し「昼夜順番に見張りし」、次第「順番」に休息す。8 巡徼「見回り」厳密にして、逃ぐる者は之れを落草と謂ひ、之れを磔す。「略」軍令して白金「しろがね」を藏ふるを得ざらしむ。10 城邑に過る「立ち寄る」も室処「部屋」

を得ず。妻子の外、他の婦人を携ふるを得ず。10 寢興「寝起き」悉く單布幕「棺の一重布製のおおい」を用ゆ。「略」9 一兵に倅馬「乗り換え用の馬」三四匹、冬は則ち茵褥「敷物」を以て其の蹠「蹄」に籍く。11 人の腹を剖りて馬槽「かいば桶」と為し、以て馬を飼ふ。馬、人を見れば、輒ち鋸牙「ノコギリ歯」に噬まんことを思ひ、虎豹の若し。「略」水は惟だ黄河を憚るのみ。淮、泗、涇、渭の若きは、則ち万衆足を馬背に翹げ、或ひは鬣を抱き、尾に縁り、風を呼んで渡る。馬蹠の壅閑する「遮り留める」所、水、為めに流れず。陣に臨み、馬三万を列ね、三堵牆「三つの垣」と名づく。12 前の者返顧すれば、後の者之れを殺す。「略」7 城を攻むるに、迎えて降らば殺さず、守ること一日にして十の三を殺し、二日にして十の七を殺し、三日にして之れを屠る。凡そ人を殺さば、屍を束ねて燎「かがり火」と為し、之れを打亮と謂ふ。城、將に陥ちんとすれば、歩兵万人堦下を環り「城壁の上の物見用の垣の下を取り巻き」、馬兵巡徼し、一人の免かれ得る無し。13 猷忠、至つて残忍なりと雖も逮ばざるなり。「略」29 自成、酒色を好まず。脱粟粗糲「粳を取っただけで精白してない、粗末な玄米」、其の下「臣下」と甘苦を共にす。b 汝才、妻妾數十にして、被服は絢綺「白絹と綾絹、上等の衣服」、帳下「居所」に女樂數部「舞樂する女性が数組」あり、厚く自ら奉養す。自成、嘗て之れを嗤ひ鄙しむ。汝才、衆数十万、山西の舉人吉珪を用いて謀主と為す。c 自成善く攻め、汝才善く戦ふ。兩人相須ふること、左右の手の若し。自成、宛、葉を下し、梁、宋に克つ。兵強く士附く。6 專制の心有り。顧みて独り汝才のみ忌む。乃ち汝才と善くする所のd 賀一龍の宴に召して之れを縛し、晨に二十騎を以

て汝才を帳中に斬り、悉く其衆を兼ね。

「崇禎十七年三月」 十八日「略」帝「略」剣に長公主「長平公主ともいう」を撃ち、皇后「周皇后」を趣し自尽せしむ。十九日丁未、天未だ明けず。皇城守られず、鐘を鳴らして百官を集むるに、至る者無し。乃ち復た煤山「北京旧皇城内の小山。万寿山」に登り、衣襟に書して遺詔「帝の遺言」と為し、帛を以て自ら山亭「山のあずまや」に縊る。帝遂に崩ず。太監「明代の宦官の長」王承恩、側に縊る。26自成、氈笠縹衣「羅紗の冠り物と青い衣」にして、烏駁馬「黒斑の馬」に乗り、承天門に入る。「略」27文臣は范景文より、勲戚「勲功ある親戚」は劉文炳以下、節に殉ずる者四十余人。24宮女魏氏河に投ず。従ふ者二百余人。象房の象皆哀吼し「悲しみ叫び」涙を流す。太子は周奎「周皇后の父」の家に投ずるも入るを得ず。二王「永王・定王」も亦匿るる能はず。27先後擁し至るも、皆屈せず。自成之れを宮中に羈ぐ。e長公主、絶して復た甦り、早かれ至る。賊劉宗敏をして療治せしむ。

「五月」6李巖は、故らに自成に勧め、殺さざるを以て人心を収めし者なり。「略」金星等大いに之れを忌む。「略」自成、金星をして巖と飲ましめ、之れを殺す。

『明史』卷三〇九「張献忠」
13 献忠は黄面長身虎領「虎のようなあご」、人、黄虎と号す。性狡譎「悪賢くて嘘つき」、殺を嗜み、一日人を殺さざれば輒ち怏怏として樂しまず。

『明史』卷三〇五「王承恩」

17 崇禎十七年「一六四四」三月、李自成闕「宮城」を犯す。帝、承恩に命じて京宮を提督せしむ「宮城を取り締まらせた」。17 是の時、事勢已に去り、城陣「城の物見垣」守卒寥寥たり。賊、飛梯「高い梯子」を架して西直、平則、德勝三門を攻む。承恩、賊の坎牆「物見垣に穴を穿つ」を見て、急に礮「砲」を発して之れを撃つ。連りに斃すこと数人。而るに諸璫泄泄として自如たり「多くの宦官たちははたるんでいて、いつもと変わらなかった」。18 帝、承恩を召し、亟やかに内官「宦官」を整へ、親征に備へしむ。夜分「夜半」、内城陥る「攻め落とされた」。天、將に曙ならんとして、帝、寿皇亭に崩す。承恩、即ち自ら其の下に縊る。福王「朱由崧、崇禎十六年福王を継ぎ、莊烈帝の死後南京に逃れ弘光帝と称す」の時、忠愍と諡す。15 本朝「清」、地六十畝を賜ひ、建祠立碑して其の忠を旌し、故主の陵側に附葬す。

『明史』卷二四「莊烈帝」

丙午、日晡「夕暮れ」、外城陥る。是の夕、皇后周氏崩す。丁未、味爽「明け方」、内城陥る。帝、万歳山に崩じ、王承恩従死す「後を追って死ぬ」。20 衣襟に御書して曰く、朕、徳涼く躬を藐んず、「略」朕死するも面目祖宗に見ゆる無く、自ら冠冕「冕板を付けた冠。帝の地位を示す」を去り、髪を以て面を覆ふ。20 賊の分裂に任ずも、百姓「一般の人民」一人も傷つくること無かれ、と。

『虞初統志』「費宮人伝」

14 費宮人は年十六、未だ其の何れの地の人なるか詳らかならず。

徳容「徳のある様子」莊麗なり。懷宗「清による廟号。崇禎帝。一六一〇〜四四」、周后に語り、命じて公主「長公主」に侍せしむ。主「公主」絶だ之れを憐れむ。宮人、上「帝」の流氣昌熾「賊の反乱の盛んなこと」なるを憂ふるを見、未だ嘗て窃かに杞人の慮「杞憂」を抱かずんばあらず。王承恩は懷宗の近侍なり。16 宮人私かに之れに向ひ、寇警「敵來襲の知らせ」を問ふ。承恩曰く、若深禁「禁中」に居るに、何ぞ此を知るを用いん「どうしてそんなことを知る必要があるのか」、と。宮人曰く、惟だ深禁に居るも、知らざるべからず。而して預め計を為すなり、と。承恩之れを奇とす。寇愈よ熾る。懷宗憂ふること愈よ深く、宮人之れを承恩に問ふこと愈よ数なり。承恩曰く、若何ぞ諸を他人に詢らずして、予に惟ること数なるや、と。宮人曰く、人皆泄洩たり「たるんでいる」。孰れか是れ、君国を以て意と為す者ぞ。吾、公の忠誠を見る。故に相問ふのみ、と。承恩益ます之れを奇とし、曰く、若預め計を為すと云ふ。計、安くにか出づる、と。宮人曰く、設し不幸ならば、計るは惟だ死有るのみ。要す徒らに死すべからざるのみ、と。承恩曰く、古人云く、生者をして死なしめ、死者復た生くとも、生者其の言を食まず「嘘を吐かない」。信と謂ふべし「誓いを交わした相手が死に、後に生き返ったとしても、約が守られていれば生き残った方は慚ずることがない。これが「信」といふべきものだ。『史記』三九「晋世家」九などに見える、春秋時代晋の献公に対する大夫荀息の言に拠る」、と。若之れを能くせんや、と。宮人曰く、請ふ、之れを異日に験せよ、と。

魏宮人なる者有り。年差費に長ず。亦端麗にして、素より費と善し。其の言を聞きて曰く、卿の計は甚だ難し。吾、難きを

為す能はざれば、其の時に当たり惟だ一死、以て吾が志を伸べんのみ、と。承恩、並びに之れを奇とす。

17 甲申三月十九日、李自成都城を破る。王承恩走りて帝に報ず。19 帝、后と泣き別る。宮中の人、皆環泣す「取り巻いて泣く」。后自縊す。袁貴妃も亦自縊す。帝、劍を抜き、御嬪妃「宮女」数人を刃斫す「斬る」。公主を召し至らしめて曰く、爾、年十五なり。何ぞ不幸にして我が家に生まるるや、と。左の袖に面を掩ひ、右の手に刃を揮ひて、f 左の臂を断つ。未だ死せざるに、手慄きて止む。随いて承恩と南宮に至り、万歲山の寿皇亭に登つて自縊す。帝は中に居り、承恩は右なり。承恩且つ從容として命を拝して鼎湖「帝の崩御をいう。黄帝が鼎湖で銅の鼎を鑄た後、龍に乗つて昇天した伝説から」に相隨ふなり。21 時に尚衣監「明代の宦官の役職。帝の冠冕や衣服などを掌る」何新なる者、趨りて宮に入る。帝に見えんとするも得ず、公主の地に仆るを見る。他の宮人は悉く散じ走る。費宮人、其の側に哭し侍す。相与に之れを救ひて甦らす。公主曰く、父皇、我に死を賜ふ。我何ぞ敢へて生を偷まんや。且つ、賊至らば必ず宮眷「帝の身内」を索めん。我終ひに匿れ難きなり、と。宮人曰く、請ふ、主の服を以て婢「費宮人の卑称。わたくしめ」に賜はらんことを。婢当に賊を誑き、以て主を脱せしむべし。顧だ安くの所にか往かんや、と。何新曰く、国丈第「岳父周奎の邸」可なり、と。主、衣を授け婢に与へて、泣きて之れと別る。新、倉皇として主を負ひて出づ。

22 李自成、承天門を26 射て、22 將に宮に入らんとす「こまだが本作十月号掲載分に対応」。23 魏宮人大いに呼びて曰く、賊は大内「禁裏」に入る。我輩必ず辱めを受けん。志有る者は

早く計を為せ、と。身を奮つて御河「禁裏を流れる溝」に躍り入る。須臾にして之れに従ひ死ぬる者、三百に盈つ。翠「カワセミの羽飾り」積み、脂凝る。河水之れが為に流れずして香ること且つ数日なり。

25 費宮人、其の死を目送して21服を還ふ。25主の服にして智井「涸れ井戸」中に匿る。28賊釣きて出す。李自成に見えて曰く、我は長公主なり。若無礼するを得ざれ、と。自成其の豊艶なるを見、心に之れを納れんと欲す。

30 而れども、御座に降ることに輒ち神揺るぎ目眩き、白衣の人の長数丈なる者、前に在りて立つを見る。又恍「ぼんやり」として、帝の其の左右より辟易する「恐れ逃げる」が如きなり。

30 心に之れを畏れて敢へてせず。以て其の愛將羅姓なる者に賜ふ。羅の闔における、衝陷「敵を攻め陣を陥れる」攻取、首功に居り「第一の功名であつた」。故に自成之れを賜ひ、以て勲に酔ふ。

羅甚だ喜ぶ。

宮人曰く、闔「闔王李自成」の命、吾敢へて違はず。然れども我は帝の子なり。爾能く祭りを設け先帝を祭りて、難に従ひし太監王承恩を其側に附し「合祀し」、従容として礼を尽くさば、則ち子に従はん、と。羅、更に喜ぶこと甚だし。其の請ひに従ふ。

宮人泣きて先帝を拝し畢る。併せて承恩を拝して曰く、王公王公、爾能く死して復た生き、以て吾が言を驗するや。吾將に平生の言を踐まんとす、と。

諸賊大いに樂を張り「管弦を奏する」、羅の為に賀ふ。羅痛飲し、大酔して内に入る。宮人も亦た酒を具へ、同牢し「夫

婦初めて食事をともにし」香酌を為す「婚礼の杯を酌み交わした」。又大觥「大杯」を以て連りに羅に飲ましむ。羅曰く、吾、子を得たり。一疏「主君への上書」を草して闔王に謝せんと欲す。而れども人無きを愧ず、と。

宮人曰く、是れ何ぞ難からん。我之れを能くす。君盍ぞ寝て我が撰し就して「上書を書き上げて」君に語るを俟たざる、と。羅、愈よ喜び、陶然として臥に就く。駒「鼻息」雷の如し。

宮人、侍女を屏去せしめ「退かせ」、燈を挑げ独坐す。中外の籟を聞くに、俱に静かなり。是に於て纖指を以て匕首を挟つ。羅賊の喉を睨み、力めて「強く」之れを刺す。羅、頸裂け、痛みを負ふて躍起す。屢ば仆れ、屢ば躍りて始めて僵る。賊衆驚き、32闔を闢排して「小門を推し開いて」之れを救ふ。已にしに及ぶこと無し「間に合わなかつた」。時に華燭尚ほ明らかなり。衆、宮人の盛粧「華やかに装い」端坐して語る無きを見る。審らかに之れを視れば、則ち已に粉項「白粉を塗ったうなじ」を剝りて悠然として逝けり。

自成に聞かすに、自成駭歎して之れを礼葬す。遂に以て公主已に死せりと為して復た索めず。

陸士雲曰く、夫子云く、惟だ女子と小人とは養ひ難しと為す「論語・陽貨」、と。女子、小人は、宦官、宮妾ならんか。宮妾の費魏の如き、宦官の王承恩の如きは、即ち丈夫、君子なり。何を以て過たんや。余、之れを伝へ、以て天下の丈夫にして丈夫ならず、君子たりと号して君子たらざる者を愧ぢしめん。

鄭醒愚曰く、毛西河言ふ、31宮人死に頻「瀕」して呼んで曰く、吾の自成を殺すを得ざるは天なり、と。蓋し宮人の初志は、自成を得るに在り。自成を得る能はずして死す。

豈に天に非ざらんや、豈に天に非ざらんや、と。然り、亦た33自成の魄を纏ふ「喪心させる」に足れり。

以上のように、一部叙述の順序を変えた箇所はあるが、本作が『明史』『虞初統志』に拠り、おおむねその記述順に語られていることがわかる^①。実際に本作と併読すれば、説明や描写が付加されることはあつても、独自の改変がほとんど見られないことがはっきりするだろう。魏宮人に従つて水死した宮女の数について、『明史』の「二百余名」でなく、『虞初統志』の「三百」を取るなど、その利用は顕著である。『骨董』（前掲）の場合と同様（注（八）拙稿参照）、本稿を「原話」と題したのである。

以下、本作で説明・描写を加えた例をいくつか挙げてみよう。まず、説明の例。①意識を取り戻した長公主が、賊から身を隠すすべもないと嘆いたのに対し、「これは如何にも道理千万で、しかも賊も尋常の賊では無い、鬼の如く夜叉の如き賊である、〔略〕何新も行詰つて語無かつた。其時、星の眼に不屈の意気を含ん」だ費宮人が、衣服を替えて公主になりすまし、公主を逃がす計略を申し出る。「何新は山窮つたところに路を得た思がした」。「公主も已む無く」衣服を授けるが、「費宮人の涙の目、公主の涙の目、涙眼相視て、言はんとして語を知らず、」という有様であつた。公主の嘆きに困惑した何新が、費宮人の申し出を聞いて望みを見出すさま、彼女を身代わりにする公主の思いが不足なく説明されている。②「智井」に潜んだ費宮人の意図について、「一時のドサクサ紛れに詰らぬ者共〔單行本以下「一時のらうがはしい紛れに甲斐無き者共」の手にかゝらぬ

やうにとの思慮でしたことは勿論です〔單行本以下「でした」〕。との説明を加えている。③羅將軍に賜つた費宮人が、崇禎帝や王承恩を祭れば將軍に従うと言つたので、將軍がいよいよ喜んだのは、「美しいのみならず、尊いのみならず、且又〔單行本以下「又」ナシ〕立派な人を吾が一生の儔としたと思つた」からだ、としている。公主になり替つた費宮人は、娘（公主）として父帝や忠臣への礼をわきまえ、「情理を尽して」言つたので、その人格の高邁さゆゑに將軍はさらに喜んだという、適切な心理説明と言えよう。④李自成への謝恩の上奏文を書くこととする羅將軍を寢室で休ませ、代わりに自分が書くと言つた費宮人が、しかし「別に謝恩の表を草するのも無かつた。」というのも、彼女の意図を明確にし、次の刺殺場面へうまく導いている。

精細な描写の例は、特に魏宮人と費宮人に看取される。「悲しく清しい声を振絞つて大に呼はつた」魏宮人は、「梨の花が冷たい夕の雨に遇つたやうに青みを帯ぶる〔單行本以下「帯びる」〕まで凄じい白い顔面に厳とした意気を漲らせて、予ての覚悟に従つて、今や生死の関を超え、斃れて而も屈せぬ精神上の勝者とならんと」、周囲に呼びかけた上、率先して入水する。一方、費宮人が羅將軍を刺殺する場面は、「玉をもて割れるが如き織き〔單行本以下「織き」〕白き指をもて、明晃々たる〔單行本以下「錦衣の下より明晃々たる」〕七首を〔單行本以下「七首を取出して」〕抜き持つた。羅のいぎたなく寝た顔を確平と見据えた。柳の眉いさゝか昂つて、星の眼きらりと輝いた途端に〔單行本以下「途端」〕、青蛇の如き七首は羅將軍の頸に咬入つた。」とあり、費宮人の美化、対照的に羅將軍のだらしなさ

が強調されている。

このように本作は、原話のいわば骨格に肉付けする形で形成された。初出で「創作」欄に掲載されず、『世界に於ける日本現代文学の位置』（千葉亀雄）『地中海遊記』（大谷光瑞）「以上十月号」『社会進化における女性の位置』（高畠素之）『生活』及びその他（武者小路実篤）『フレップ・トリップ』（十二）北海道樺太紀行（北原白秋）「以上十一月号」などの評論・随筆・紀行とともに掲載されたのも、作者の意向ゆえであろう。初出で敬体・常体が混在していること（注（二）参照）、単行本収録の際に修訂された箇所が多いこと（注（三）は、原稿のべ切に追われたためと推測され、魏宮人・費宮人に関する比喻・形容の平凡さ、解釈上面倒な箇所^{（三）}の放置も、それが原因と考えられる。療養中の長男成豊のため露伴の多作した時期であった。費宮人・魏宮人への注目は、本作の標題「暴風裏の花」に明白である。「賊は殆んど不可抗力の如くに逼つてまゐりました。恰も一天の暴風雨が襲来する時に、草も偃し、樹も倒れ、葉も飛び、枝も裂け、砂は走り、石は叫ぶやうな状態でありました。」「略」此の恐ろしい暴風雨の裏に果敢無くなつた琪花^{（三）}「単行本以下ルビ「きくわ」、瑤草^{（三）}「単行本以下ルビ「えうさう」は何程有つたか知れません。其の中に明の宮廷で脆くも口惜しくも散り碎けた二つの美しい立派な花がありました。」との比喻を受けて、まず費宮人の話が導かれるのである。

このように、「掘るところ有る事実の本づいて、尠少の傳彩補筆を加へ」（前掲『龍姿蛇姿』自序）た本作であつたが、ただ一点、独自の改変と言うべき所がある。公主を殺そうとした帝が、娘への愛情に絆され、「わづかに公主の左の御臂を傷つ

けたまひたれど、御手慄ひて復剣を揮ひたまふ能はず、公主に自ら処する道を論じたまひたるとゞめ」た、という箇所である。「費宮人伝」では、前引二重傍線部^f「左の臂を断つ」であり、これは『明史』巻二二「列伝」九「長平公主」でも「以劍揮斫之断左臂」（剣を以て揮ひて之れを斫り、左の臂を断つ）と共通する。左ひじを切断した、ということであり、痛みに耐えきれず、二重傍線部^eのように『明史』巻三〇九でも公主は意識を失うのである。しかし本作では、女性向け雑誌という性格上、残酷な描写を改めたのであろう。「わづかに「略」傷つけ」と、軽少な傷にしたため、公主に意識があり、帝は「自ら処する道を論じ」た、としたと考えられる。しかし後文では、「氣絶して居られた公主^{（三）}」を何新と費宮人が介抱し、意識を取り戻した、と「費宮人伝」の記述にそのまま従つたため、前後齟齬してしまつた。これは些細な点だが、大げさに言えば史実の改変にならう。

四

本作が「掘るところ有る」点は確認できたが、それは果たして「事実」だったのであろうか。本作末尾に「此の費宮人の事は明史には出て居らぬが」（前掲）というが、しかし『明史』巻一一四「列伝」二「后妃」二「末尾」には、「宮人魏氏」とともに「宮人費氏」の伝がある。

宮人費氏年十六自投晉井中賊鉤出見其容容爭奪之費氏給曰我長公主也羣賊不敢逼擁見李自成自成命宦官審視之非是以賞部校羅

某者費氏復給羅曰我実天潢義難苟合將軍宜挾吉成礼羅喜置酒極飲費氏懷利刃俟羅醉斷其喉立死因自詫曰我一弱女子殺一賊帥足矣遂自刎死自成聞大驚令收葬之

宮人費氏は年十六、自ら智井中に投ず。賊釣きて出し、其の姿容を見て、争ひて之れを奪ふ。費氏給きて曰く、我は長公主なり、と。群賊敢へて逼らず、擁して李自成に見ゆ。自成、中官「宮中の宦官」に命じて之れを審視「じつくり視る」せしむるに、是に非ず。以て部校「部隊を率いる將校」羅某なる者に賞ふ。費氏復た羅を結きて曰く、我実天潢「皇族」なり。義として苟合「しつこくあはさむ」し難し。將軍、宜しく吉を挾び礼を成す「良き日を選び、婚礼を済ます」べし、と。羅喜び、置酒し「酒宴を開いて」飲びを極む「歓迎の心を十分に尽くした」。費氏利刃を懷き、羅の酔ふを俟ちて其の喉を断てば、立ちどころに死す。因りて自ら詫りて曰く、我は一弱女子なるも、一賊帥「賊の頭目」を殺すに足れり、と。遂に自ら刎りて死す。自成聞きて大いに驚き、之れを収め葬らしむ。

ここに登場する「部校羅某者」とは誰なのだろうか。『明史』卷三〇九「李自成」を読む限り、その「部校」で「羅」姓のものは、羅汝才しか考えられない。前引二重傍線部 a「自成、自ら奉天倡義大元帥と号し、羅汝才を代天撫民威德大將軍と号す」や、c「自成善く攻め、汝才善く戦ふ。兩人相須ふること、左右の手の若し」等に拠れば、羅汝才は李自成一の片腕といつてよく、「部校」「將軍」と呼ぶに相応しい。『虞初統志』『費宮人伝』でも「衝陷攻取、首功に居り。故に自成之れを賜ひ、以て勲に

酔ゆ」とある。また、b「汝才、妻妾数十にして、被服は絢綺、帳下に女樂数部あり、厚く自ら奉養す」とあるように、彼は女好きで、29「酒色を好ま」ない李自成とは正反対であった。そのため、「自成、嘗て之れを嗤ひ鄙しむ」とあるように、二人の関係は良好ではなかった。6「専制の心有」った李自成一は、「顧みて独り汝才のみ忌」み、汝才と仲良しのd「賀一龍の宴に召して之れを縛し、晨に二十騎を以て汝才を帳中に斬」る、というように、酒宴で油断した羅汝才を騙し討ちにしたのである。女好き、酒好きという点は、『虞初統志』『費宮人伝』とも共通し、長公主（実は費宮人）を賜わって「羅甚だ喜ぶ」、また「諸賊大いに樂を張り、羅の為に賀ふ。羅痛飲し、大酔して内に入る。宮人も亦た酒を具へ、同牢し盞酌を為す。又大觥を以て連りに羅に飲ましむ」とある。

とすれば、早い段階で、李自成一の片腕ながら正反対の性格で女好き酒好き、ついには李自成一に殺された將軍羅汝才をモデルとし、新たに費宮人を創出した伝奇的物語が生成・伝承された結果、『明史』「后妃」列伝中に「宮人費氏」として定着した可能性があろう。『明史紀事本末』（前掲注（六））卷七九「甲申之変」には、この『明史』「宮人費氏」と同内容の記事があるほか、尚衣監何新が蘇生させた長公主を背負って「国太府中」へと逃げる場面もあり、『天間閣文集』^{（千四）}一「甲申宮人伝」や『虞初統志』『費宮人伝』はこれらに拠つて潤色した可能性がある。

しかし、上記の「宮人費氏」には一貫した計画性が乏しいように思われる。潤れ井戸に隠れたが発見されたため、身分を偽ることで身の安全を願ったが、長公主ではないと簡単に見頭さ

れてしまう。軍功あつた羅將軍に与えられ、身を汚されるのを恐れて皇族と詐つたがそれも空しく、最後は隙に乗じて羅將軍を殺害し自殺した、というようにも読めるからである。これに対し、『虞初統志』『費宮人伝』ではさらに小説的脚色が加わり、初めから長公主の身代わりとなつて李自成に近づき、その「愛將羅姓」なる者を刺殺する設定へと成長していったのではないだろうか。主人の身を守るとともに、敵を討ち果たす美女という形象は、その先例として唐・宋代の伝奇の女侠、例えば「聶隱娘」(『太平広記』巻一九四、出典『伝奇』、「紅綫」(同一九五、出典『甘沢謡』、「荆十三娘」(同一九六、出典『北夢瑣言』、李公佐「謝小娥伝」(同四九一)などを想起させるが、現実味ある点で「謝小娥伝」に類似する。

五

以上見たように、費宮人の存在にはいささか疑問があり、「拠るところ有る事実」「稀有の事実」と判断するには躊躇いを覚える。もともと、「事実無根の談ではない」(本文末尾)、「自分の造り出した事では無い、拠るところは本文に記して置いた通り」(前掲「自序」と言うならば、何の問題も生じない。すなわち、「事実」か否かではなく、自身の創作か否か、ということである。この基準でいえば、いわゆる史伝物の嚆矢『頼朝』(明治四十一年九月東亜堂書房)以降、露伴は創作を忌避し、「事實は皆本づくところの有つて、捏造や仮託は全く為さぬ」(『頼朝』「引」)態度で執筆に当たつたといえる^(十五)。露伴の広範な知識は、創作を阻むものだったかも知れない。

こうした姿勢は、本作と同時期の『骨董』(前掲)や晩年の『幻談』(前掲)、『雪たゞき』^(十六)(昭和十四年三・四月『日本評論』、『連環記』^(十七)(昭和十六年四月・七月『日本評論』)に至つても揺るがない。史料批判、正史と稗史の別、史実と小説の差について、その判別の困難を承知しつつ、注(十五)出口論文が指摘するように、ことさらにそれに深入りすることなく先行文献を用いたように思われる。

谷崎潤一郎は、『饒舌録(感想)』(昭和二年三月『改造』)で「筋の面白さ」に「芸術的評価」を与えた上で、スタンダーの『パルムの僧院』や『カストロの尼』『チェンチ一族』などを激賞し、日本にこれを求めた時、露伴の『運命』『幽情記』(大正八年三月大倉書店)、『骨董』などは「さすがに遜色がないやうに思ふ。」と述べている。一方、芥川龍之介は『明治文芸に就いて』(大正十四年十月。遺稿)で、「露伴は唯古今の書を読み、和漢の事に通ぜるのみ。紅葉の才に及ぶべからず」(『芥川龍之介全集』二十二所収、一九九七年十月岩波書店)と喝破した。芥川の評価は明治期のものに限られるが、谷崎の推賞した上記諸作がそれぞれ典拠に依存している^(十八)ことを鑑みると、芥川の評価に左袒したくなる。

しかし、意に適つた話を歴史文献から見出し、それに説明や描写を加えてわかりやすく一般読者に示し、興味を惹くように語る手法自体は、もつと評価されてよいのではなからうか。本作について言えば、「稀有の事実」ではあつても「自分の造り出した事では無い」「拠るところ有る事実」と語ること、読者は歴史の重みを感じるようになる。ここに、史伝物以降の基本的スタンスがあつたと思われる。

典拠への依存度の高い本作は、フィクションを重んずる近代小説として読めば低評価を免れまい。しかし、そうした作品であっても、典拠を適宜配置し、登場人物の心理を掘り下げ、その場のありさまを鮮明に描写することで、読者を感じさせることはできよう。読後、しばし主人公の上に思いを潜ませる読者も多かったのではないだろうか。露伴文学を近代文学史に定位するためにも、こうした観点からの評価や考察が求められる。

〔付記〕

露伴作品の引用は初出により、単行本との主な異同を記した。引用文は、漢字を通行の字体に改め、適宜ルビを省いた。「」内は須田による注記を示す。

〔注〕

(一) のち『龍姿蛇姿』(昭和二年一月改造社。以下「単行本」と略)掉尾に収録の際、『暴風裏花』と改題。『龍姿蛇姿』収録作品『観画談』『望樹記』『不見罕山』『清系縁起』『憤恨種子』『怪傑誕生』に合わせて、「の」を削ったか。以後、露伴生前には、同題で『露伴全集』四(昭和五年五月岩波書店。以下「全集」と略)、改造文庫版『龍姿蛇姿』(昭和十四年十一月改造社。以下「文庫版」と略)、『露伴史伝小説集』二(昭和十八年四月中央公論社。以下「史伝集」と略)に収録。本文は総ルビの初出に拠ったが、パルビの単行本を経たため、総ルビに復した全集・史伝集では初出と異なるルビが振られるケースが目立つ。なお、本稿論題には、岩波文庫や『露伴全集』などで一般化している『暴風裏花』を採った。

(二) ただし、初出では敬体・常体入り交じって不統一である。十月号掲載分冒頭く七一頁一行目「交情が善いのだが、」(岩波書店版『露伴全集』(昭和五十三年七月)六で三二六頁二行目)まで敬体だが、それ以降十一月号掲載分一七五頁十行目「御溝に飛び入った。」(同三三〇頁九行目)まで常体。次行から敬体に復するが、一七八頁二行目「情理を尽して言った。」(同三三三頁一三行目)く末尾まで常体。『龍姿蛇姿』で敬体に統一された。以下、この種の異同は記さない。

(三) 昭和二十六年十月、未見。披見本は昭和三十四年四月第十三刷。

解説塩谷贊(文末に「昭和二十六年九月」とある)。

(四) 第二代建文帝を、叔父の燕王(のちの永楽帝)が攻め、帝位を奪った事件。一三九九く一四〇二年。

(五) 乾隆四年(一七三九)七月成。以下、『欽定明史』(光緒二十九年「一九〇三」)五洲同文局石印版(京都大学附属図書館蔵)に拠る。本書は、柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」(一)(二)(昭和四十一年三く四月『文学』)に見える「欽定二十四史」のうち。

(六) 谷応泰撰、順治十五年「一六五八」自序。光緒十三年「一八八七」広雅書局刊本(京都大学人文科学研究所蔵)に拠る。

(七) 以下、嘉慶七年「一八〇二」自序、咸豐元年「一八五一」重刊、小嬢嬢山館蔵板本(京都大学人間・環境学研究所総合人間学部図書館蔵)に拠り、句点・圈点を省いた。『虞初統志』の固有名は「露伴先生蔵書瞥見記」(前掲)に見えないが、該「瞥見記」所載の「筆記小説大観 四函」に収録されていた可能性がある。京都大学人文科学研究所蔵「筆記小説大観 一百五十一種」(文明書局石印本の影印を用いた民国五十一年「一九六五」再版六冊本)所収本を参照した。なお、『骨董』の原話、姜紹書『韻石齋筆談』

も該「筆記小説大観 四函」に収録されていた可能性がある。

(八) 拙稿「幸田露伴『骨董』の原話」(平成十八年三月『叙説』参照。

(九) 青木稔弥『『幻談』の典拠』(平成五年九月『文芸論叢』参照。

(十) 本作と同様の出典による和文作品に、本作発表の約百年前、文政十一年「一八二八」刊行の石川雅望訳『通俗排悶録』第一輯巻二所収「費宮人」がある(溪斎英泉画)。本書は、徳田武「読本と清朝筆記小説——『今古奇談』通俗排悶録について——」(『江戸漢学の世界』一九九〇年七月ぺりかん社)が指摘するように、清の孫洙『排悶録』の訳で、その改題後印本『異聞録』(道光十八年「一八三八」重鐫、述古堂藏板。京都大学人文科学研究所蔵)巻二には「費宮人伝 陸雲土作」(目録「費宮人伝 錢塘陸次雲雲土」)とある。これは、本作の「陸士雲」と作者名が相違する上、鄭醒愚の評を欠くため「毛西河の言」も存在しない。従って、本作の出典は『異聞録』や『通俗排悶録』ではない。なお、『排悶録』と『異聞録』の関係や、『異聞録』『費宮人伝』と『通俗排悶録』『費宮人』の画像、後者(『通俗排悶録』『費宮人』)の翻字は、『排悶録』とその改題本『異聞録』に就いて・「費宮人伝」(徳田武氏のブログ「雲烟過眼録」二〇一〇年八月十七日・十八日の記事)に指摘・掲載されている(二〇一四年一月二〇日確認)。私は、本作の出典『虞初統志』に気付いた後、先行文献を調査する過程で徳田氏のブログを参照した。本作の出典に関する指摘は管見に入らなかったため、『虞初統志』『費宮人伝』との関係を具体的に明らかにすべく本稿を草した。

(十一) 初出で、魏宮人が入水するよう「教へ諭した。そして其の例を示すべく」とある箇所は、単行本以下では「教へ諭しました。

声は寒夜の星の下に黄金の鈴の「全集・史伝集「鈴を」」振ふが如く、心は烈燄の火の中に善財童子が身を跳らせんとするが如くでありました。そして其の例を示すべく」と、さらに入念に描写されている。

(十二) 前注(十一)の挿入が最大の異同である。その他、本稿で言及した以外について、単行本との主な異同を示す。↑の上が単行本で、便宜上、(一)内に前掲新版「露伴全集」六の頁数行数を注記した(ただし新版全集独自の修訂は(一)内に記した)。↑の下は初出本文。〽は改行を示す。

- ・氷の池へ臨ませる地獄の鬼のやうな(三三八頁一〇行)↑氷の池へ臨ませるやうな
- ・然様いふ世間(三三〇頁三行)↑然様いふ中
- ・自戒の暴悪な醜(醜い男(三二二頁一〇行)↑自戒の醜い男
- ・参加しました。それを(三三二頁二行)↑参加したのを
- ・暴れました。／自戒は(同六行)↑暴れましたが、
- ・十分の七を(同一五行)↑十分の七の人を
- ・人だか鬼だか分らない斯様いふ者が(三四四頁六行)↑斯様いふ人だか鬼だか分らない者が
- ・相当の家の者(三三五頁二行)↑相当の者
- ・居たまふもの(同一二行)↑居るものである
- ・裂帛の声を做して、悲号を(三二七頁九行)↑裂帛の悲号を
- ・それから御最愛の公主を(同一一行)↑それから公主を
- ・何新はたゞ(三三九頁三行)↑何新は又たゞ
- ・云はるゝにたがう「文庫版以下「ふ」まじ(三三〇頁九行)↑云はるゝ通りである
- ・悲喜するものであります。(三三一頁一行)↑悲喜するもので

ありますが、

・敢てしませんでしたので（同一四行）↑敢てしませんでしたり

・国難に（皆国難に）（同一五行）↑皆国難に

・躬（三三三頁八・九・一一・一二行。但し一二行は「躬も」）↑吾

・躬を強ひたまふとも（同一二行）↑吾を強ふとも

・で、羅將軍は（同一四行）↑そこで羅將軍は

・畢りまして、それから（三三四頁二行）↑畢つた。それから

・愧かしきことながら（同九行）↑愧かしいことには

・これのみ今の吾が心に（同一〇行）↑これだけが心に

・それほどのこと（同一一行）↑それは

・身「全集・史伝集「躬」は才拙けれど（同一二行）↑吾は

・中夜（中夜）（三三五頁一行）↑中夜

・あゝ、「史伝集読点ナシ」これも天命か、憾めしい（同一〇行）

↑天命が憾めしい

・熟視しますと、ヒ首は既に深く喉に（同一三行）↑熟視ると、ヒ

首は既に深く

（十三）例えば、本作で王承恩の語る「古の人の言ふたことがござる、

生きてゐる者をして死なしめ、死したる者をして復生かして、

生きてゐる者其の言を食まずば信なりと謂ふべしと。」は漢文訓読

体に近く、単行本の際に「古の人の言ひたることあり、生ける

者をして死なしめ、死せる者をして「略」と、さらに訓読化が

進んだが、これだけでは意味が取りにくい。また、「国文第」を

「国文の邸」とするのは単純な言い換えに過ぎない。

（十四）『求恕齋叢書』所収。光緒二十二年「一八九六」後序を持つ。

民国十一年（一九二二）版（京都大学人文科学研究所蔵）に拠る。

（十五）これに関しては、『頼朝』以前の歴史小説でも多数の文献を

用いて一定の考証を行っていた点も含め、出口智之「幸田露伴『頼朝』論——露伴史伝の出發——」（平成二十二年四月『国語と国文学』のち『幸田露伴の文学空間——近代小説を超えて』二〇一二年九月青簡社所収）などに詳しい。

（十六）『足利季世記』（『史籍集覽』十三所収、明治三十五年五月近藤活版所）卷一「畠山記」の「雪タ、キノ事」に拠る。昭和十四年五月十七日の辰野隆との「対談」（同年七月『革新』）で、露伴が「畠山記の或るところに、「雪たゝき」といふ題からして存在してゐるので、」などと言及している。ここでも露伴は「あの通り畠山記にあるんです。私が新發明して製造したものではないんです」「略」私が手製で変な言葉「雪たゝき」という語」や変な物語を出したのではないんです。」と断っている。典拠との対比による作品分析は、徳田武「都賀庭鐘と幸田露伴——一つの「雪たゝき」——」（昭和五十五年三月『明治大学教養論集』）が詳しく、「人間性の描写の深化」に近代小説としての『雪たゝき』の価値を認めている。

（十七）拙稿「幸田露伴『連環記』と『大日本史』（平成二十三年三月『叙説』）、「幸田露伴『連環記』と古典」（平成二十五年十二月『高知大國文』）参照。

（十八）『運命』は『明史』『明史紀事本末』などに拠り（福本雅一注釈「運命」、日本近代文学大系6『幸田露伴集』昭和四十九年六月角川書店）、『幽情記』は主として馮夢龍編『情史』、徐鉉編『続本事記』に拠る（王善潔「幸田露伴『幽情記』の典拠考」二〇一〇年二月『日本語と日本文学』）。

（すだ ちさと・本学大学院人間・環境学研究科教授）